

周室東遷考

吉 本 道 雅

一

春秋期に特徴的な政治構造として、覇者による諸侯の統合が認められる。踐土の盟（前六三二）より召陵の会（前五〇六）まで（以下、これを「春秋中期」と称し、春秋経文の記述が始まる前七二二から前六三二までを「初期」、前五〇六から『左伝』の記述の終わる前四六八までを「末期」と称する）は、盟主たる晋に中原諸侯が従属する時期で、この時期の政治構造を、その継続性のゆえに「覇者体制」と称することが認められよう。

「覇者体制」の前史を検討する場合、第一に留意すべきは、晋文公に先行する覇者たる齊桓公の覇業であるが、実のところ、中原における齊の覇権は、「及平王之末、而秦晋齐楚代興、……齊莊僖於是乎小伯」（鄭語）と、桓公に先行する齊莊公（前七九四―前七三一）・僖公（前七三〇―前六九八）においてすでに「小伯」として先駆的に達成されていたとされる。

莊公については、『史記』が年数を伝えるのみで、かれが「小伯」を称された具体的な事情は不明であるが、その在位年代は東遷期（前七七〇—前七二三⁽¹⁾）の大半と重なる。この東遷期については事実関係の具体的な確認さえ充分には行われていない。周の東遷についての従来の研究は、基本的には東遷に至る西周末期の状況の分析に傾斜し、平王東遷および東遷期そのものについては簡略といわざるをえない。これは、東遷期を対象とする史料の希少さに由来する。西周末期の如き、比較的多数かつ長文の金文史料は最早存在せず、文献史料についても、前七二二以降について春秋経伝の年代記的記述が存在するのと異なり、東遷期については、『左伝』に追記の形式の記事が散見するほか、『古本竹書紀年』に独自の記事がみえるものの、いずれも断片的なものであるに過ぎない。「東遷期」とはかかる金文史料・文献史料双方についての史料的「暗黒時代」の謂に他ならない。

筆者は前稿において、西周・春秋を通時的に扱った文献史料なる観点に立って、『史記』の東遷期を扱った部分の史料的人格につき若干の私見を提示した。本稿の目的は、前稿の論点を応用して王朝の動向を中心とする東遷期の具体的な政治過程を可能な限り復元し、ついで、斉の「小伯」を動機付けた中原の政治状況を説明することにある。

二

周の東遷の発端についての量的に最大の伝承は、鄭語に認められる。鄭語は、本文と後語に分かれ、本文は、始末二節を地の文とする他は、鄭桓公・史伯の六節の問答という体裁を採る。史伯の予言は、本文が成立した時

期の知見を仮託したものと判断される。本文は「楚」を「荆」に改める一方で、「啓」を用いるので、秦莊襄王・漢文帝の間の最終的成立となる。⁽³⁾

幽王滅亡の次第は、桓公・史伯の第四の問答に見え、⁽⁴⁾ 晋語一にも要約される。⁽⁵⁾ 内容は次の如くである。①幽王は褒姒を寵愛し伯服を生んだ、②褒姒と結ぶ卿士虢石父は、申后の子太子宜臼（のちの平王）を廃し、伯服を太子とした、③太子宜臼は舅国申に亡命した、④宜臼送還を求め拒否された幽王は申に出兵した、⑤申と結ぶ繒・西戎が周を伐ち（晋語は申・鄆（繒）が西戎を招いて周を伐たせたとする）、幽王は敗滅した。

周本紀は率ね『国語』に拠るが、⁽⁶⁾ ついで、周の東遷について、

於是諸侯乃即申侯、而共立故幽王太子宜臼、是爲平王、以奉周祀、平王立、東遷于維（維）、辟戎寇、

と、「諸侯」が申侯を支持して平王を「共立」し、洛陽に東遷したとする。実のところ、平王の洛陽（維）奠都までの事情は複雑である。『左伝』昭二十六の王子朝の言に、

至于幽王、天不弔周、王昏不若、用愆厥位、携王好命、諸侯替之、而建王嗣、用遷（維）鄭鄆、

と、幽王敗滅と平王の洛陽（維）奠都の間に、携王の王位僭取があったことを記し、正義の引く『竹書』は、⁽⁷⁾ ①平王は西申に出走した、②幽王・伯盤（『国語』の伯服）の敗滅（前七七二）以前に、平王はすでに申において、申侯・魯侯・許文公に擁立されていた、③幽王敗滅後、虢公翰が王子余臣を携で擁立した、④晋文侯二十一年（前七六〇）、晋文侯が携王を殺害した、という、『国語』にみえず、周本紀に矛盾する事情を伝える。こちらに拠れば、幽王在世中、すでに王朝は、宗周の幽王と申の平王に分裂していたことになる。

指摘すべきは、『竹書』が戎申の連合に言及せぬことである。現存の『竹書』佚文が、他書に見えぬために引用保存された事情を考えれば、『竹書』に本来戎申連合が記されていなかったと断言することはできないが、①戎の幽王討滅、②申侯の平王擁立、が本来独立の事件で、『国語』が両者をはじめて関連付けたという想定さえ可能となる。

平王と戎の関係についての周本紀の記述は抑も矛盾しており、戎は申侯とともに幽王討滅に参加し、従って平王を支持していたはずであるのに、幽王滅亡後、平王は戎の「寇」を避けたとするのである。⁽⁸⁾さらに、周本紀は、この戎寇を避けた結果を洛陽冀都とする。洛陽冀都の年次について、周年表は「東徙雒邑」を平王元年（前七七〇）に繋げるが、実のところ、『史記』或はその原史料は抑も洛陽冀都の正確な年次をもたなかった模様である。周本紀が「幽王三年」ののち、「（平王）四十九年、魯隱公即位」まで年次を記さないことはそれを傍証する。周年表が「東徙雒邑」を平王元年に繋げるのは、実は、この事件が、平王在位中——「元年」とは限らない——に年代付けられることを示すに過ぎない。魯惠公夫人出生を、宋世家が、

三十四年、戴公卒、子武公司空立、武公生女為魯惠公夫人、生魯桓公、十八年、武公卒、

と、武公即位の直後に記すのに対し、宋年表がその末年たる十八年に繋げるのは、正確な年次をもたぬにも関わらず、年表という体裁上、いずれかの年次に繋けぬわけにはいかず、便宜的に末年に繋けたものである。洛陽冀都を平王元年に繋げるのも、同様の処理に基づくものとすべきである。また、世家の多くが、齊世家「莊公二十四年（前七七二）、犬戎殺幽王、周東徙雒、秦始皇列為諸侯」の如く、幽王敗滅の年次に洛陽冀都をまとめて繋

けるのも、同様に、『史記』が本来その正確な年次を有さなかったことに由来するものと思われる。さらに、『今本竹書紀年』「(平王)元年辛未、王東徙洛邑」が周年表に拠ることは表現上明白である。

平王の洛陽冀都の年次についてのより確実な材料は、『左伝』僖二十二年(前六三八)の、

初、平王之東遷也、辛有適伊川、見被髮而祭於野者、曰、不及百年、此其戎乎、其礼先亡矣、秋、秦晋遷陸渾之戎于伊川、

に認められ、これに拠れば、洛陽冀都は降つて前七三八以降となる。『左伝』所見の「東遷」の語が、洛陽冀都を限定的に指すことを証する材料は実はなく、むしろ、平王の申における即位以降の王朝の関中から中原(東)への遷徙を広く含むと考えるべきであるが、この「東遷」に限っていえば、⁽¹⁰⁾周の大夫辛有が伊川に赴くことから、洛陽冀都を指すものと了解される。『史記』・『今本竹書紀年』に拠り、洛陽冀都を前七七〇とする従来の論者は、前六三八が前七七〇から一三三年目となり、「不及百年」と矛盾することに、すでに気付いていた。そこで、杜預は、「計此去辛有過百年、而云不及百年、伝拳其事驗、不必其年信」と論ずるが、無稽の説であり、また、『左氏会箋』は、

自平王元年、至今百三十三年矣、伊川之為戎聚既久、……不及百年一句、伊川之有戎、瞭然可知、伝既書伊雒之戎同伐京師於十一年、彼此相照而益明了、

と、前六七〇以前に戎が伊川周辺にいたことを主張するが、それでは辛有の予言談を前六三八の事件に繋げた意味がなくなり、本末を転倒している。さらに、楊伯峻は、「或辛有之言説于中葉」(『春秋左伝注』、中華書局、

一九八一、三九四頁」と、「辛有適伊川」以下を前七三八以降とし、「平王之東遷也」と切り離すが、やはり前七七〇洛陽冀都に拘泥する無稽の説である。

洛陽冀都が前七三八以降に降ることが了解されたであろうが、このことは、幽王敗滅と一連のものとされる戎寇を避けた結果を東遷とする周本紀の記述を疑わしめる。周本紀と同様の記述は、秦本紀にもみえる。

①（襄公）七年（前七七二）春、周幽王用褒姒廢太子、立褒姒子為適、數欺諸侯、諸侯叛之、西戎犬戎与申侯伐周、殺幽王酈山下、②而秦襄公將兵救周、戰甚力、有功、周避犬戎難、東徙雒邑、襄公以兵送周平王、③平王封襄公為諸侯、賜之岐以西之地、曰、戎無道、侵奪我岐豐之地、秦能攻逐戎、即有其地、与誓、封爵之、……④十二年（前七六六）、伐戎而至岐、卒、

①は周本紀に同じい。問題は②③である。「襄公為諸侯」そのものは、春秋中期の金文史料が襄公以下を正式の先公に列すること⁽¹¹⁾で一応信用できるが、③の平王の命辭は、当時の文言としては甚だ異様であり、信用しがたい。また、抑も洛陽冀都が前七三八以降に降るのであるから、「襄公為諸侯」を洛陽冀都への援助としての戎との交戦の代償とする②③の記述は、二次的な因果關係の設定に基づくものとなる。秦本紀を傍証として、(i)平王と戎の対立、(ii)戎寇を避けた結果としての東遷、という周本紀の記述を認めることはできないのである。因に、匈奴列伝が、「秦襄公救周、於是周平王去酈鄠而東徙雒邑、当是之時、秦襄公伐戎至岐、始列為諸侯」と、②③の順で記述することや、上掲の齊世家の如く、世家の多くが幽王敗滅の年次に襄公の諸侯への昇格を付することを勘案すると、『史記』が本来、「襄公為諸侯」の正確な年次を有さなかった可能性さえ生じてくる。平王と

戎の対立は、衛世家にも、

（武公）四十二年（前七七二）、犬戎殺周幽王、武公將兵往佐周平戎、甚有功、周平王命武公為公、

とある。この記事の信憑性については、前稿ですでに触れた。衛世家に拠ると、衛君は、康伯―貞伯が「伯」を、頃侯・釐侯が「侯」を、武公以降が「公」を諡号に用いる。要するにこの記事は、武公称公の所以を説明したものであるが、一体、衛世家は、頃侯称侯を「頃侯厚賂周夷王、夷王命衛為侯」と説明し、降って戦国中・晩期の部分にも、

（成侯）十六年、衛更貶号曰侯……嗣君五年、更貶号曰君、

とある。諡号に用いられる称谓の変更が、秦燕曹晋にも認められるにも関わらず、『史記』がこれらに何ら説明を施さないことは、衛世家の如上の説明の特殊性、延いてはこれらの説明が、衛世家編纂の時点でなされたのではなく、その原史料に由来することを示唆する。更に、『史記』が、衛世家において、かかる原史料の説明をそのまま採用しつつ、他国については説明を施しえなかったことは、これらの説明それ自体が、頃侯・武公の在位年代が偶然にも夷王・平王のそれに重なっていたためなされた、衛世家の原史料における二次的推論に基づくことを示す。すなわち、①称谓の昇格には王朝の承認を要する、②称公の承認は武公の功績への代償である、③衛武公（前八二―前七五八）は幽王敗滅の際に在位していた、④王朝に対する功績とは戎に対する軍事行動に他ならない、という推論があったものと思われる。従って、これも平王・戎の対立なる周本紀の説を傍証しない。

『竹書』で今一つ注目されるのは、魯侯・許文公の平王擁立への関与である。平王擁立に関与した諸侯として、

鄭語は申呂繒を挙げる。申については、秦本紀に、孝王期における申と秦・戎の通婚を伝える⁽¹²⁾——『国語』の戎申連合はこうした材料を論拠とするものであろう——のが最も古く年代付けられ、ついで、宣王期（前八二七—前七八二）の『詩』大雅・崧高に王室との通婚・河南南陽付近⁽¹³⁾への移封が見える。新出の中冉父簋一・二は、この南陽の申を「南申」と称している。関中から申へは、今日の西安から商県・西峡を経て南陽に至るルートが推定される⁽¹⁵⁾。呂（甫）も河南南陽付近にあり、「申呂」と併称される⁽¹⁶⁾。繒は、河南方城に比定される。

『竹書』は、太子宜臼が当初「西申」に出奔したとする。童書業は、この「西申」を、南陽の申の本族が関中に残存したものとし、南陽の申の平王擁立への不関与を主張するが、後述の許魯の平王擁立への関与からして、この説は成立しがたい。「西申」は、関中より南陽に移封された申が、関中畿内の旧領に保持した領地⁽¹⁸⁾で、太子宜臼は、一旦「西申」に出奔したのち、南陽の申に移動し、そこで推戴されたものと考えられる。

申呂繒は、春秋期、楚が漢水方面⁽¹⁹⁾から「方城」を経て中原に侵入する交通路上に位置する⁽²⁰⁾。楚の中原侵入路の一つとして、「方城」から許の北方を経由して洧水東岸に至るルートが挙げられる⁽²¹⁾。この申呂↓繒↓許は、西周期には洛陽より漢水方面に至るルートの一つでもあったと思われる。地政学的な役割の共通性から、許と申呂とは、同一の政策の対象となり、相互に利害を共有しえたであろう。こうした次第で、許の平王擁立関与を伝える『竹書』の記述は、鄭語の申呂繒による平王擁立と矛盾なく了解される。

一方で、遙か東方の曲阜に都城を構える魯の関与は、一見唐突である。白川静氏は、魯を曾（＝繒）の誤とするが、⁽²³⁾ 実のところ、魯はこの頃、許の付近に所領を有していた。

鄭伯請祫泰山之祀、而祀周公、以泰山之祫易許田、（『左伝』隱八。杜注「成王營王城、有遷都之志、故賜周公許田、以為魯國朝宿之邑、後世因而立周公別廟焉」）

の「許田」である。前七一二に斉魯鄭が許を降した際、斉が魯に許を与えようとした（『左伝』隱十二）のも、魯がこの地域に一定の權益を有したことに由来し、降って、魯僖公（前六五九―前六二七）の時期の『詩』魯頌・閟宮も、許に言及する。⁽²⁴⁾東遷の際の魯の平王擁立への関与がこの「許田」保有に依存したことは疑いない。⁽²⁵⁾

魯の平王擁立への関与はかかる地理的要因以外に、魯が政局に占めていた役割にも関わる。『竹書』の「魯侯」＝魯孝公（前七九六―前七六九）については、周語上に、

三十二年春、宣王伐魯、立孝公、諸侯従是而不睦、宣王欲得国子之能導訓諸侯者、樊穆仲曰、……乃命魯孝公於夷宮、（章注「命為侯伯也」）

とある。「侯伯」＝覇者策命という韋昭説に直ちに従うことは憚られるが、王朝の諸侯への特殊権能の付与は、同じく宣王期の『詩』大雅・韓奕の、韓侯への策命にも認められる。⁽²⁶⁾魯孝公が、宣王に公認された諸侯を「導訓」する特殊な機能を東遷の際まで保持した可能性を指摘しえよう。

周の東遷の第一段階が、申呂繒許魯の平王擁立であったことが了解されたであろう。ところで、周の東遷について、『左伝』・『国語』はむしろ鄭晋の関与に専ら言及するが、東遷の第二段階で、鄭晋の関与が認められないのは、いかなる事情に由るのか。

三

鄭の東遷は、鄭語本文の始末の地の文および桓公・史伯の第一の問答に見える。⁽²⁸⁾ 内容は次の如くである。①鄭桓公は幽王の司徒として、「周衆」と「東土之人」の人心を得ていた、②王室の混乱（太子宜臼廢位を指すものか）に際し、桓公は桀と賄を「済洛河潁之間」の虢（東虢）および郕に寄託した、③幽王が敗滅すると、虢郕は桀・賄を横領した、④桓公はこれを口実に「成周之衆」を率いて虢郕を制圧し、鄭など八邑を獲得した。

鄭世家が鄭語に拠りつつ、後語の「十一年而斃」を桓公の死と誤解して、鄭語に改変を加えたことは前稿すでに論じた。この「斃」は、第四の問「周其弊乎」の幽王敗滅を指す。桓公東遷は、『左伝』昭十六にもみえ、⁽²⁹⁾ 『竹書』に拠ったと思われる『漢書』地理志京兆尹鄭渠顔師古注引臣瓚説には、

幽王既敗、二年（前七六九）而滅會、四年（前七六七）滅虢、居於鄭父之丘、是以爲鄭桓公、

とあり、滅郕のことは、『公羊』桓十一・『韓非子』内儲説下にもみえる。⁽³⁰⁾ これらを傍証として、第一の問答の史伯の予言が、桓公の事績に関する後代の知見として、更めて確認される。

注目すべきは、桓公の虢郕併合における「成周之衆」動員で、幽王敗滅後、洛陽付近は桓公の制圧下にあったことになる。すなわち、この時点で、①申の太子宜臼（平王）、②携の王子余臣、③洛陽付近の鄭桓公⁽³¹⁾ 王子友、の三者が鼎立していたのである。『左伝』・『国語』に散見する鄭による周の東遷援助が、鄭武公に言及するのみで、桓公に触れないこと⁽³²⁾——桓公を前七七一敗死とする鄭世家の判断の根拠の一つであろう——は、桓公の平

王に対する自立を暗示する。桓公も、平王・携王と同様に王子であり、二王並立に際して、いずれかに臣従する必然性は抑もなかった。平王はもとの幽王の太子とはいえ廢太子であり、携王に至っては、『竹書』に「以本非適故称携王」とあるのみで、先王との正確な続柄も伝わらない。『史記』の伝える如く、懿王・孝王・夷王三代の王位継承の混乱を王朝がすでに経験していたことを想起すると、鄭桓公＝王子友は、王として自立することさえ選択しえたのである。⁽³⁴⁾

しかしながら、遅くとも前七六〇には、鄭桓公が卒し、これを嗣いだ武公が平王に臣従したらしい。鄭の自立放棄の経緯は不明であるが、『竹書』によると思われる⁽³⁵⁾『後漢書』南蛮西南夷伝「平王東遷、蛮遂侵暴上国、晋文侯輔政、乃率蔡共侯擊破之」によれば、晋文侯は、携王殺害にやや先立ち（十二諸侯年表は、蔡釐侯・共侯の卒を前七六二・前七六〇とする）、上蔡（汝水東岸）の蔡とともに、蔡以南のおそらくは淮水流域へ出兵したが、晋が蔡に至るには、黄河を渡り、新鄭から南下して汝水に至り、これを下るルートを採用したものと思われる⁽³⁶⁾。このルートは先の許↓繒↓申呂ルートと交差し、鄭晋及び鄭と平王を奉ずる申とが対立状態にあれば、これを晋が利用することは困難なはずで、この事実は、前七六二―前七六〇以前に鄭が晋との友好を樹立し、平王に帰順したことを示す。鄭武公の申との婚姻⁽³⁸⁾も、鄭申講和を前提とする⁽³⁹⁾。

『左伝』・『国語』の伝える晋文侯・鄭武公の平王に対する勤王とは、この東遷の第二段階を指す。『竹書』に拠れば、晋文侯は、ついで前七六〇に携王を殺害し、二王並立に終止符を打った。携が地名であることは前掲『竹書』の記述に明らかである。その地望について雷学淇は、「新唐書大衍麻議謂、豊岐驪携、皆鶉首之分、雍

州之地、是携即西京地名矣」(『竹書紀年義証』二十七)と論ずるが、唐代の伝承に依存し確實ではない。『竹書』は、虢公翰がこの携王を擁立したとする。虢については別稿で詳論した。⁽⁴⁰⁾ 虢の根拠地は、関中のほか、河南陝県(西虢)、河南滎陽(東虢)にあったが、虢公翰とこれらとの関係や、携王擁立以後の動向は全く不明である。

この頃、関中では秦の東進が進行しつつあった。襄公を嗣いだ文公(前七六五—前七一六)が東遷期の大半から春秋初頭にかけて在位したが、秦本紀には、

四年(前七六二)、至汧渭之会、……即營邑之、……十六年(前七五〇)、文公以兵伐戎、戎敗走、於是文公遂取周餘民有之、地至岐、岐以東猷之周、

とある。十六年の記事の信憑性は措くとしても、岐山以東の渭水流域には、西安付近の亳など戎系の諸国があり、そこに王朝の支配が実質的に再編されたとは考えがたい。

寧公二年(前七二四)、……遣兵伐蕩杜(史記索隱「西戎之君号曰亳王、蓋成湯之胤、其邑曰蕩杜」、三年(前七二三)、与亳戰、亳王奔戎、遂滅蕩杜、(秦本紀)

と、亳は春秋初頭によりやく制圧される。この段階で秦の中原への恒常的な出兵がはじめて可能になった模様で、『左伝』では、秦は桓四(前七〇八)「秋、秦師侵芮、敗焉、小之也、冬、王師・秦師圍魏、執芮伯以歸」に初見する。この事実は、遡って襄公の時期において、秦が平王の洛陽冀都を援助したとする秦本紀の記述の依拠⁽⁴²⁾がたいことを更めて傍証するであろう。

鄭武公・莊公は平王の卿士となり、洛陽付近を王朝に移管した。『左伝』莊二十一（前六七三）が、王朝が鄭厲公に賜与した虎牢以東の領土を「武公之略」と称するのは、それが本来、鄭武公の領土で、のちに王朝に移管されたことを示している。平王の洛陽奠都が前七三八以降に降ることは既述の如くである。この時期に至って、平王が申から洛陽に遷徙した直接の動機は不明である。ただ、この前七三八以降の洛陽奠都は、春秋初期の政情を理解する伏線として少なからぬ意味をもつ。東遷の第二期における晋文侯の勤王はすでに述べたが、文侯が前七四六に卒したのち、晋では、

惠之二十四年、晋始乱、故封桓叔于曲沃、……惠之三十年、晋潘父弑昭侯而納桓叔、不克、晋人立孝侯、（『左伝』桓二）

と、前七三九（魯惠公三十年）以降、前六七八に至るまで、翼と曲沃の内戦が継続し、王朝への支援など行いえない状態に陥る。王朝の洛陽奠都は、この晋の内戦勃発以降のこととなる。

平王の申から洛陽への遷徙は、鄭が、申許などの勢力圏から自己の勢力圏に王朝をとりこんだことを意味するが、注目されるのは、鄭語本文第三の問答である。

公曰、謝西之九州、何如、対曰、其民沓貪而忍、不可因也、唯謝邲之間、其冢君侈驕、其民怠沓其君、而未及周德、若更君而周訓之、是易取也、且可長用也、

と、「謝邲之間」の鄭による制圧が予言されている。謝は河南南陽の申呂の疆域に他ならず、邲は汝水北岸の河南邲県である。邲は、春秋期に楚が「方城」から鄭に侵寇する一つのルート上に位置する。⁽⁴⁴⁾「謝邲之間」とは邲

から春秋期の「方城」の地を経て申呂に至るルートの謂に他ならず、鄭は申呂↓繒↓許ルートを許の西方で遮断することで、東遷の第一段階に平王を擁立したこれらの諸侯を圧倒したわけで、平王の洛陽冀都は、鄭のかかる優勢を背景としたものと思われる。

洛陽冀都の際、王朝に直接の影響力を行使しうる勢力は、晋が内戦に陥ったことで、鄭以外には最早存在しなくなっていたのである。春秋初期における鄭莊公の活躍は、この東遷の第三段階における、鄭の王朝への影響力独占を前提に、更めて納得される。

しかしながら、今一つ留意しておかねばならないのは、洛陽冀都を契機に、王朝が洛陽以西の諸侯との交渉を再開したことである。

鄭武公・莊公為平王卿士、王貳于虢、鄭伯怨王、……王崩、周人將畀虢公政、（『左伝』隱三＝前七二〇）と、平王末年にはじまる王朝の西虢への接近は、春秋初期に一貫して認められる王朝の洛陽以西の諸侯への接近志向⁽⁴⁵⁾の開始を示す。

四

東遷期から春秋初期は、中原の有力諸侯（春秋中期以降の春秋経文に大夫の名が記され、或は『史記』十二諸侯年表に列せられる諸侯）の成長期であり、その疆域拡大は、春秋初期の諸侯間関係の基本的な規定要因であった。ここで整理しておこう。

表 1

国名	史料	大夫
韓	鄭語韋注「近宣王時,命韓侯為侯伯,其後為晉所滅,以為邑,以賜桓叔之子万,是為韓万,則其亡在平王時也」	韓万;『左伝』桓3初見
耿霍魏	『左伝』閔元	『左伝』閔元「賜趙夙耿,賜畢万魏,以為大夫」
虞虢冀	『左伝』僖2, 5 『左伝』僖2「冀為不道,入自顓臾,伐鄆三門,冀之既病,則亦唯君故」; 滅国は僖2以降	虢射;『左伝』僖15初見 冀芮;『左伝』僖10初見
荀	『漢書』地理志右扶風枸邑県条顔師古注引臣瓚說「汲郡古文,晋武公滅荀,以賜大夫原氏黯,是為荀叔」	荀息;『左伝』僖2初見
賈	『左伝』桓9「虢仲・芮伯・梁伯・荀侯・賈伯伐曲沃」; 滅国は桓9以降	賈華;『左伝』僖10初見

鄭桓公による「濟洛河潁之間」の東虢・鄆以下十邑の制圧は、単なる疆域拡大とはいえないが、自立的な諸勢力が、より大きな範囲で政治的に統合されたという点で、逆に、疆域拡大の理念型に近いものともいえる。また、晋の滅国を整理すると表1の如くである。魏を与えられた畢万の子孫が魏氏を称するように、旧国名を氏とする大夫の存在は、晋が滅国ののち、それを采邑として大夫に賜与したことを示す。

滅国による疆域の拡大及び、そのあるものが大夫の采邑となった状況が晋に限らないことは、経文の記述に端的に現れる。経文の「滅」の用例のうち、楚呉越や戎狄が関与するものを除くと一〇例を得るが、うち春秋初期五例、中末期五例⁽⁴⁶⁾で、初期には一八年に一

例、中末期には三三年に一例となり、初期には中末期の二倍近い頻度で滅国が行われていることがわかる。「滅」の表現を採らぬものの、事実上の滅国となる事例⁽⁴⁷⁾を加えると、初期には六・四年に一例、中末期には一三・八年に一例となり、春秋初期の中原における滅国の盛行がより一般的な動向であつたことが了解される。

東遷期における滅国の具体的な状況は不明である。しかしながら、晋の滅国が滅韓以外は春秋初期に集中すること、そしてこれが前七三九―前六七八の内戦で、晋がこの時期に滅国を行えなかつたことに由来することを想起すれば、そうした障害をもたない他の有力諸侯においては、東遷期よりすでに、滅国が進行したことが容易に推測される。

付言すべきは、かかる疆域の「拡大」が、一定の連続性をもつ領域の形成を、一面で志向したことである。魯の「許田」領有はすでに述べたが、鄭の「済洛河潁之間」平定に伴い、「許田」をめぐる魯鄭紛争が生じた。『左伝』隠十一「公之為公子也、与鄭人戰于狐壤」は、魯惠公（前七六八―前七二三）の頃、公子であつた隱公が、河南許昌北方の狐壤で鄭と交戦したことを伝えるが、これが「許田」に関わることは、地望からいって疑いない。前七一五（隱八）の領土交換における魯の「許田」に対する杜預の「各從本国所近之宜」なる解釈は、領域形式を指摘するものとして支持しえよう。

有力諸侯の成長は、その周辺の諸侯との間に一定の從属關係を形成させた。春秋初期の魯に対する来朝を経文より挙げると表2の如くである。魯のこれらに対する朝聘は經文に見えず、この来朝が偏務的の行為であつたことを窺わせる。その限りにおいて、これらは魯の從属国と看做しうる。他の有力諸侯については、魯についての春

表 2

隱11	滕侯・薛侯来朝
桓 2	滕子来朝
〃	杞侯来朝
桓 6	紀侯来朝
桓 7	穀伯綏来朝, 鄧侯吾離来朝
桓 9	曹伯使其世子射姑来朝
桓15	邾人・牟人・葛人来朝
莊 5	倪犂来来朝
莊23	蕭叔朝公
莊27	杞伯来朝
僖 7	小邾子来朝
僖20	郕子来朝
僖27	杞子来朝

秋経文の如き均質かつ通時的な史料を欠くが、同様に從属国を擁したことは疑いを容れない⁽⁴⁸⁾。

春秋初期に至る有力諸侯の疆域拡大や、周辺諸侯との從属關係の形成は、ついで、一定の規模に達した有力諸侯間の、疆域や從属国をめぐる恒常的な対立關係を醸成した。紛争の恒常化が、国人の軍事的負担を増大させ、諸侯の国人に対する支配を動揺させた⁽⁴⁹⁾ことが、紛争解決を究極的な目的とする、諸侯間の同盟關係を推進させたのである。

齊莊公・僖公の「小伯」とは、かかる同盟關係の統合者としての地位を指すものに他ならず、それは有力諸侯の疆域拡大という一般的情勢を基本的な条件とするものであったと思われる。

註

(1) 東遷期については、拙稿「史記原始(一)——西周期・東遷期——」(『古史春秋』四、一九八七)参照。

以下、「前稿」と略称。

(2) 童書業『春秋史』(開明書局初版、一九四一)、許倬雲「周東遷始末」(『求古編』、聯經出版事業公司、一九八二、八三一—一五頁)など。

(3) 先秦・前漢諸文獻の避諱については、拙稿「國語小考」(『東洋史研究』四八—三、一九八九)参照。

(4) 鄭語「夫虢石父諂諂巧從之人也、而立以為卿士、与剽同也、棄聘后而立内妾、好窮固也、……………褒人褒姒有獄、而以為入於王、王遂置之、而嬖是女也、使至於為后而生伯服、……………申繒西戎方彊、王室方騷、將以縱欲、不亦難乎、王欲殺太子以成伯服、必求之申、申人弗畀、

必伐之、若伐申、而繒与西戎会以伐周、周不守矣、繒与西戎方將德申、申呂方彊、其隕愛太子亦必可知也、王師若在、其救之亦必然矣、王心怒矣、虢公從矣」

(5) 晉語一「周幽王伐有褒、褒人以褒姒女焉、褒姒有寵、生伯服、於是乎与虢石甫比、逐太子宜臼、而立伯服、太子出奔申、申人、鄩人召西戎以伐周、周於是乎亡」

(6) 周本紀は「幽王以虢石父為卿、用事、国人皆怨、石父為人佞巧善諛、好利、王用之、又廢申后、去太子也、申侯怒、与繒西夷犬戎攻幽王、幽王拳燹火徵兵、兵莫至、遂殺幽王驪山下、虜褒姒、尽取周賂而去」と、「西戎」を「西夷犬戎」とし、また「幽王拳燹火徵兵」以下は、この記事の前の「褒姒不好笑」以下の結東部で、「呂氏春秋」疑似に類似的の說話がみえる。また匈奴列伝には、「周幽王用寵姫褒姒之故、与申侯有郤、申侯怒而与犬戎共攻殺周幽王于驪山之下、遂取周之焦穫、而居于涇渭之間、侵暴中国」とある。

(7) 『左伝正義』昭二十六「汲冢書紀年云、平王奔西申、而立伯盤以為太子、与幽王俱死于戲、先是申侯・魯侯及許文公立平王於申、以本太子故称天王、幽王既死、而虢公翰又立王子余臣於携、周二王並立、二十一年、携王為晉文公所殺、以本非適故称携王」

(8) 于逢春「周平王東遷非避戎乃投戎辯——兼論平王東

遷的原因」(『西北史地』一九八三—四) 参照。

(9) 魯世家「孝公二十五年(前七七二)、諸侯畔周、犬戎殺幽王、秦始列為諸侯」、燕世家「頃侯二十年(前七七二)、周幽王淫乱、為犬戎所弑、秦始列為諸侯」、蔡世家「釐侯三十九年(前七七二)、周幽王為犬戎所殺、周室卑而東徙、秦始得列為諸侯」、曹世家「惠伯二十五年(前七七二)、周幽王為犬戎所殺、因東徙、益卑、諸侯畔之、秦始列為諸侯」、陳世家「平公七年(前七七二)、周幽王為犬戎所殺、周東徙、秦始列為諸侯」、宋世家「戴公二十九年(前七七二)、周幽王為犬戎所殺、秦始列為諸侯」、晉世家「文侯十年(前七七二)、周幽王無道、犬戎殺幽王、周東徙、而秦襄公始列為諸侯」、楚世家「若敖二十年(前七七二)、周幽王為犬戎所弑、周東徙、而秦襄公始列為諸侯」

(10) 『左伝』の「東遷」の用例は僖二十二のほか、襄十「昔平王東遷、吾七姓從王、……………」および、註(27)後掲の隱六の事例があるが、いずれも洛陽冀都を明示するわけではない。また、鄭語「桓公為司徒、甚得周衆与東土之人」、韋注「東土、陝以東也」は、中原を「東土」と汎称する事例である。

(11) 秦公簋・秦公罇一の「十又二公」の同定について諸説があつたが、一九七八年出土の秦公鐘・罇二に、「秦

公曰、我先且受天令、商宅受或、刺々邵文公・靜公・憲公、……」とあり、「我先且」——蓋・縛一の「不顯朕皇且」——が文公の先代たる襄公に当たることが、ほぼ確実となった。白川静『金文通釈』四（白鶴美術館、一九七三）一一三四頁、六（同、一九八〇）三九八―四〇九頁参照。

(12) 秦本紀「非子居犬丘、好馬及畜、善養息之、犬丘人言之周孝王、孝王召、使主馬于汧渭之間、馬大蕃息、孝王欲以為大駱適嗣、申侯之女為大駱妻、生子成為適、申侯乃言孝王曰、昔我先鄭山之女、為戎膏軒妻、生中湍、以親故歸周、保西垂、西垂以其故和睦、今我復與大駱妻、生適子成、申駱重婚、西戎皆服、所以為王、王其圖之、於是孝王曰、昔伯翳為舜主畜、畜多息、故有土、賜姓嬴、今其後世亦為朕息馬、朕其分土為附庸、邑之秦、使復統嬴氏祀、号曰秦嬴、亦不廢申侯之女子為駱適者、以和西戎」

(13) 以下、地望は、譚其驥『中國歷史地圖集』一（地圖出版社、一九八二）に拠る。

(14) 崔慶明「南陽市北郊出土一批申國青銅器」（『中原文物』一九八四―四）、李學勤「論仲再父簋與申國」（同）

(15) 『左伝』僖二十五「秋、秦晋伐郿、楚闚克・屈禦寇以

申息之師戍商密、秦人過析、限入而繫輿人以圜商密」・文五「秦人入郿」は、秦がこのルートを用いた事例である。また、宣三「楚子伐陸渾之戎、遂至於錐」は、楚がこのルートを逆に辿り、洛水上流に達した事例である。

(16) 註(22)後掲『詩』王風・揚之水のほか、『左伝』成七「子重請取於申呂、以為賞田、……此申呂所以邑也」。

(17) 前掲書四七頁。童氏は、註(12)前掲秦本紀より「西申」を驪山付近とし、『後漢書』西羌伝引「竹書」の「申戎」に同定するが疑問である。

(18) 松井嘉徳「西周期鄭（冀）の考察」（『史林』六九―四、一九八六）は、例えば、井について、冀井叔・咸井叔・豊井叔―内服諸侯の井本族―外服諸侯の井侯の如く、鄭などの地―内服―外服という周王を中心とした三つのレヴェルにおいて、特定諸侯が分族を配する事例を指摘する。関中の西申―南陽の申の関係も同様に理解しうる。

(19) 『左伝』莊六「楚文王伐申過鄧」は、楚が漢水流域の鄧を経由して申に至った事例である。

(20) 申が楚に併合されたのち、息とともに楚の中原進出に動員された（「申息之師」は『左伝』僖二十五、成六、襄二十六所見）のも、申の地望に由来する。また、

續には「繒閔」が置かれた(『左伝』哀四)。

- (21) 『左伝』成十六「楚子救鄭、……過申、……晉楚遇於鄢陵」では、楚師は申を経たのち、洧水東岸の鄢陵に到達している。途中の經由地としては、「方城」外の葉・汝水北岸の汜・潁水北岸の狼淵が推定される。葉は宣三「鄭文公……生公子士、朝于楚、楚人酈之、及葉而死」・昭十八「葉在楚國、方城外之蔽也」と、「方城」から中原に抜ける際の最初の要地である。汜は成七「楚子重伐鄭、師于汜」・襄二十六「楚子伐鄭、……涉於汜而歸」と、汝水における渡河点であり、文九「楚子師于狼淵以伐鄭」の狼淵は、襄十「諸侯之師環鄭而南、至於陽陵、……与楚師夾潁而軍、……宵涉潁」とあるやや北方の陽陵とともに、潁水の渡河点であった。汜・狼淵・鄢陵を結ぶ直線のやや南方に、許は位置する。
- (22) 『詩』王風・揚之水は申・甫(呂)・許への成を記す。毛序は平王期の作とし、申が楚に併合される以前の状況を前提とする。申の併合は、『左伝』哀十七「彭仲爽、申俘也、文王以為令尹、実巢申息、朝陳蔡、封畛於汝」より、楚文王(前六八九―前六七七)の時期となる。
- (23) 『詩経研究』(朋友書店、一九七二)一三一頁
- (24) 『詩』魯頌・閟宮「居常与許」、毛伝「常・許、魯南鄙・西鄙」、鄭箋「許、許田也、魯朝宿之邑也」

(25) 『春秋経』桓七に「穀伯綏來朝、鄧侯吾離來朝」とある。鄧穀は漢水流域にあり、この來朝が、許を経由したことは容易に推測される。抑も、鄧穀の來朝が、かつて許を根拠地とした魯の漢水方面への影響力を示唆している。

(26) 『詩』大雅・韓奕「韓侯受命」、毛伝「受命、受命爲侯伯也」

(27) 『左伝』隱六「我周之東遷、晉鄭焉依」、宣十二「昔平王命我先君文侯、曰、与鄭夾輔周室、毋廢王命」、晋語四「晋鄭兄弟也、吾先君武公与晋文侯戮力一心、股肱周室、夾輔平王、平王勞而德之、而賜之盟質、曰、世相起也」

(28) 鄭語「桓公為司徒、甚得周衆与東土之人、問於史伯、曰、王室多故、余懼及焉、其何所以逃死、史伯対曰、……其洛河潁之間乎、是其子男之國、虢郇為大、虢叔恃勢、郇仲恃險、是皆有驕侈怠慢之心、而加之以貪冒、君若以周難之故、寄孥与賄焉、不敢不許、周乱而弊、是驕而貪、必將背君、君若以成周之衆、奉辭伐罪、無不克矣、若克二邑、郇弊補舟依縣歷華、君之土也、君前華後河、右洛左濟、主茅騁而食溱洧、修典刑以守之、是可以少固、……公説、乃東寄孥与賄、虢郇受之、十邑皆有寄地」

(29) 『左伝』昭十六「昔我先君桓公与商人皆出自周、庸次比耦、以艾殺此地、斬之蓬蒿藂蘖而共处之」

(30) 減鄆については、張以仁「鄭国減鄆資料的検討」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』五〇—四、一九七九)、黄彰健「論鄭桓公減鄆、並論京兆鄭鼎非鄭桓公封邑、申臣瓚說」(『大陸雜誌』六〇—五、一九八〇)があるが、鄭桓公前七七二卒に拘泥するなど、支持しえない点が少なくない。

(31) 『公羊』桓十一「古者鄭国处于留、先鄭伯有善于鄆公者、通乎夫人、以取其国而遷鄭焉」を勘案すれば、鄭は当初、留におり、鄆を経て新鄭に遷徙したことになる。梁曉景「劉国史迹考略」(『中原文物』一九八五—四)は、留を劉に同定し、その地望を河南偃師西南に比定する。

(32) 註(27)前掲晋語四および『左伝』隱三「鄭武公・莊公為平王卿士」、襄二十五「我先君武王為平桓卿士」。

(33) 鄭世家は、「周厲王少子而宣王庶弟也」とし、鄭年表は「周宣王母弟」とする。また『史通』雜説上は「而竹書紀年出於晋代、学者始知……鄭桓公厲王之子、則与經典所載、乖刺甚多」とあるが、これは本来「鄭桓公宣王之子」とあったはずである。松井嘉徳「周王子弟の封建——鄭の始封・東遷をめぐって——」(『史林』七

二—四、一九八九) 参照。

(34) しかしながら、桓公が実際に王位についたことを示す材料はない。一九二七年に新鄭で出土した王子嬰次鐘の作器者を鄭君子儀(前六九四—前六八〇)に比定し、鄭伯称王を主張する説があるが、楚王子嬰齊(子重)とすべきである。白川静『金文通釈』四(前掲)二二七—二四三頁参照。

(35) 『後漢書』の『竹書』利用は、西羌伝の李賢注に確認される。この南蛮西南夷伝の記事や、東夷伝「厲王無道、淮夷入寇、王命虢仲征之、不克」については、李賢は特に『竹書』に拠ったことを注しない。西羌伝に殊更に注するのは、前稿に指摘した如く、西羌伝の記事が、『竹書』・秦本紀に交互に拠るためである。

(36) 蔡は西周期にすでに、淮水方面への遠征基地であった。駒父盨蓋「南中邦父命駒父毆(即)南者侯率高父見南淮夷、厥取厥服、……我乃至于淮、小大邦亡敢不口具逆王命、四月、遷至于蔡、作旅盨」。白川静『金文通釈』六(前掲)二二三—二二九頁参照。

(37) 『左伝』襄二十六「楚伍参与蔡太師子朝友、其子伍举与声子相善也、……声子将如晋、遇之於鄭郊」は、蔡から晋に至るに、新鄭を経由した事例である。新鄭から汝水流域へは、註(21)に挙げた汜を経由するルートのも

ほか、『春秋経』定四「公及諸侯盟于皐鼬」と皐鼬で潁水を渡河し、南下して汝水流域に至るルートが推定される。上蔡から淮水流域へは、『左伝』莊十「蔡哀侯娶于陳、息侯亦娶焉、息嬀將婦、過蔡」と、南下して息に至るルートがより一般的であった。成六「晋師遂侵蔡、楚公子申・公子成以申息之師救蔡、禦諸桑隧」の桑隧はこのルート上の拠点であった。また、隱十一「息侯伐鄭、鄭伯与戰于竟」は、息侯が息↓上蔡↓新鄭ルートを北上した事例である。

(38) 新鄭は勿論のこと、洛陽以東の黄河南岸の渡河点は、当時鄭の掌握下にあった。洛陽北方の蒍・劉（註(31)に言及した）は、『左伝』隱十一「王取鄭・劉・蒍・邲之田于鄭」と、前七一二の周鄭領土交換まで、鄭の領土であった。虎牢（制）は、『左伝』隱元「及莊公即位、為之請制、公曰、制、巖邑也、虢叔死焉」と、虢の邑を鄭が征服したものである。鄭の領土は東方では、同「大叔又収貳以為己邑、至于廩延」と、少なくとも廩延にまで及んでいた。

(39) 『左伝』隱元に「初、鄭武公娶于申、曰武姜、生莊公及共叔段、莊公寤生、驚姜氏、故名曰寤生、遂惡之、愛共叔段、欲立之、亟請於武公、公弗許」とあり、鄭年表は武公十年、十四年、十七年に「娶申侯女武姜」、

「生莊公寤生」、「生大叔段、母欲立段、公不聽」をそれぞれ繋げるが、鄭年表の紀年には問題がある。すなわち、鄭年表は、桓公・武公・莊公の年数を三十六年（前八〇六―前七七二）、二十七年（前七七〇―前七四四）、四十三年（前七四三―前七〇一）とするが、桓公卒年を前七七一とするのは、既述の如く『史記』の誤解に係る。従って、①桓公三十六年の年数が正しく、始封年次が逆算された値である、②始封年次が正しく、年数が計算された値である、という二つの可能性において、この三代の年数・年次双方を同時に信用することはできない（但し、莊公卒年は『春秋経』桓十一に見え確實である）。類似の事例として、晋年表は、穆侯四年、七年、十年に「取齊女為夫人」、「以伐条生太子仇」、「以千畝戰、生仇弟成師、二子名反、君子譏之、後乱」を繋げ、穆侯の年数が十一年の錯誤でありながら、四年、七年、十年の年次が正しいことは、前稿で述べた。鄭武公について年数の方に問題があり、年次が信用できる可能性がある。武公十年の年次が正しいとすると、上掲の臣瓚説より、桓公は少なくとも前七七七まで在位したので、武公十年は前七五七以降となり、前七六〇以前における武公の平王への帰順に適合的となる。

(40) 拙稿「虢叔旅鐘」（『泉屋博古館紀要』三、一九八

六)

(41) 秦始皇本紀に附載されている秦王名表は「憲公」に作る。註(11)に言及した新出の秦公鐘・罍二にも「憲公」とあり、秦本紀の「寧公」は転写の誤とすべきである。

(42) 秦本紀「武公元年(前六九七)、伐彭戲氏、至于華山下」と、秦は中原への直通路の完全掌握に更に十数年を聞している。

(43) 『詩』大雅・崧高「于邑于謝、南国是式、王命召伯、定申伯之宅」、鄭箋「申伯忠臣、不欲離王室、故王使召公定其意、令往居謝」

(44) 『左伝』昭元「楚公子圉使公子黑肱・伯州犂城犂・椽・邲、鄭人懼」の犂は沘水南岸、椽は潁水南岸であり、犂↓邲↓椽は「方城」から新鄭に至る最短ルートとなる。

(45) 拙稿「春秋齊霸考」(『史林』七三―二、一九九〇)参照。

(46) 莊十「齊師滅譚」、莊十三「齊人滅遂」、僖二「虞師・晉師滅下陽」、僖十七「滅項」、僖二十五「衛侯燬滅邢」(以上初期)、襄六「莒人滅鄆」、同「齊侯滅萊」、襄十「遂滅偃陽」、定四「蔡公孫姓帥師滅沈」、定六「鄭遊速帥師滅許」(以上中末期)

(47) 隱二「無駭帥師入極」、隱十一「公及齊侯鄭伯入

許」、莊元「齊師遷紀邢鄆部」、莊四「紀侯大去其国」、莊十「宋人遷宿」、莊三十「齊人降鄆」、閔二「齊人遷陽」、僖五「晉人執虞公」、僖十九「梁亡」(以上初期)、僖三十三「秦人入滑」、文五「秦人入郛」、宣九「取根牟」、成六「取郛」、襄十三「取郛」、昭十八「郛人入郛」、哀八「宋公入曹」(以上中末期)

(48) 『左伝』定元「宋仲幾不受功、曰、滕薛邾、吾役也」は、宋がこれら三国を従属国と看做していたことを示す。

(49) 春秋期の「国」における国人の軍事的機能については、拙稿「春秋国人考」(『史林』六九―五、一九八六)参照。因に、宋殤公弑殺は『左伝』桓二「宋殤公立、十年十一戰、民不堪命」と、軍事負担の強化に対する国人の不満に乗じたものであり、狄による衛の滅亡は、『左伝』閔二「衛懿公好鶴、鶴有乗軒者、將戰、国人受甲者皆曰、使鶴、鶴実有利位、余焉能戰」と、国人の離反に基づくものであった。

